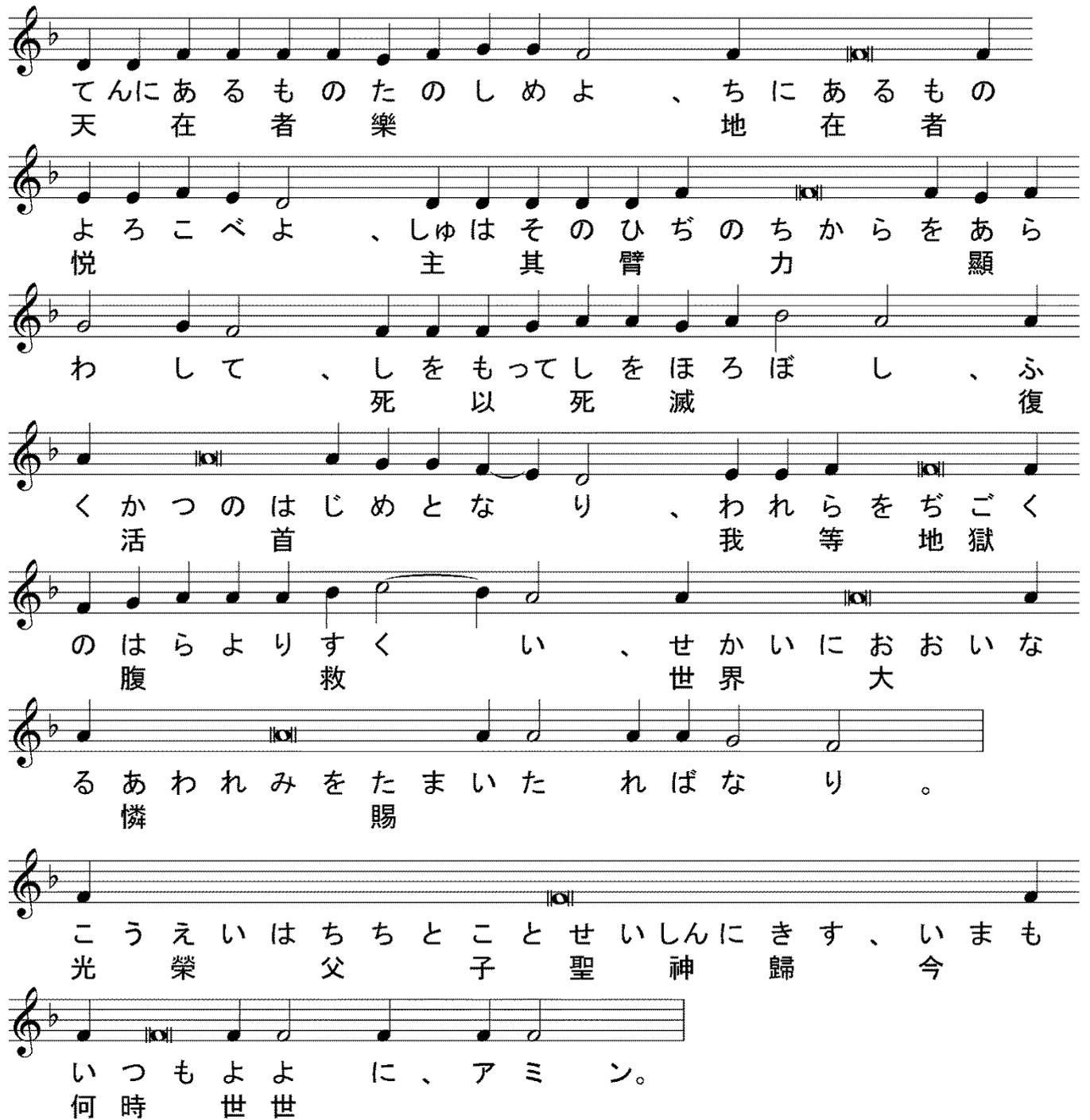


【 復活讃詞 第3調 】



てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
天 在 者 樂、地 在 者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもってしをほろぼし、ふ復
死 以 死 滅 ぼ し、 復

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
腹 救 世界 大

るあわれみをたまいたればなり。
憐 賜

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
何 時 世 世

【 日本の亜使徒ニコライの讃詞 第4調 】



しととひとしくどうぎなるものちゅう
使 徒 等 同 座 る 物 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえられたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こ う
 満 器 我 國 光

し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き よ う せ い ニ コ ラ イ
 照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ 、 な ん ぢ の ぼ く ぐ ん の た あ め 、 お よ び
 爾 羊 群 爲 及

ぜん せ か い の た め に 、 い の ち を た も う せ い
 全 世 界 の 爲 命 賜 聖

さん しゃ に い の り た ま え 。
 三 者 祈 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより 聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより 讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行ふ者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのもものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第3調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、我が神に歌い歌えよ、我が王に歌い歌えよ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

わがかみにうたいうたえよ、わがお王
 我 神 歌 歌 我 王
 うにうたいうたえよ。
 歌 歌

誦經) 我が神に歌い歌えよ、



【 使徒經 (アポストロス) 200 端 ガラティヤ書 1 章 11 節~19 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルが^{じん たつ}ガラティヤ人^{しよ よみ}に達する書の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^きみて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、^{われなんぢら} 我 ^つ 爾 等に告ぐ、^{わ つた} 我が傳えし^{ふくいん} 福音は^{ひと} 人に由るに^よ 非ず。蓋 ^{あら} 我 ^{けだしわれ} 人より^{ひと} 之を受け、

^{これ} 之を^{まな} 學びしに^{あら} 非ず、^{すなわち} 乃 ^{もくし} イイス ^よ ス ^{なんぢら} ハリストスの^わ 默示に^{さき} 由るなり。爾 等は我が先に^き イウデ

^{きょう} ヤ教 ^あ に在りし^{とき} 時^{おこな} に ^{ところ} 行いし^き 所 ^{すなわちわれはなはだ} を聞けり、^{かみ} 即 ^{きょうかい} 我 ^{きんちく} 甚 ^{これ} しく神の^う 教會を^を 窘逐し、之を

^{ざんがい} 殘害し、^{かつ} 且 ^{きょう} イウデヤ ^{しんぼ} 教 ^わ に進歩して、^{どうぞく} 我が同族の中^{うち} の年 ^{とし} 相若し^あ き^{おお} 多くの^{ひと} 人に^こ 越え、^{きわ} 極

^{せんぞ} めて先祖の遺傳に^{いでん} 熱 ^{ねつちゆう} 中 ^{しか} せり。然れども我が母の胎より^わ 我 ^{えら} を簡びて、^{そのおんちゆう} 其恩 ^{もつ} 寵 ^を を以て

^{われ} 我 ^め を召しし^{かみ} 神が、^{よろこ} 悦 ^{そのこ} びて、^わ 其子 ^{うち} を我が内^{あらわ} に ^{われ} 顯 ^{これ} し、^{いほうじん} 我 ^{ふくいん} をして之を異邦 ^{ふくいん} 人に ^を 福音せしめ

^{とき} んとせし^{われただち} 時、^{けつにく} 我 ^{あいはか} 直 ^{また} に血肉と相謀らず、^{のぼ} 亦 ^{われ} イエルサリムに^{さき} 上りて^{しと} 我 ^な より先に使徒と爲り

^{もの} し者を見ず、^み 乃 ^{すなわち} アラヴィヤに^ゆ 往き、^{のちまた} 後 ^{かえ} 亦 ^つ ダマスクに^{さんねん} 返れり。嗣^こ ぎて三年を越えて、^を ペト

^み ルを見ん爲^{ため} に^{のぼ} イエルサリムに^{じゅうごにちかんかれ} 上り、^{とも} 十五日間 ^い 彼 ^た と偕に^{しと} 居たり。他の使徒は、^{しゅ} 主の兄弟 ^{けいてい} イ

^{ほか} アコフの外、^{だれ} 誰 ^み をも見ざりき。

(比較用 口語訳)

兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言うておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第3調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなんぢ たの ねが われよよ はぢ え} 主よ、我爾を恃む、願わくは我世に差を得ざらん、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{わ ため けんご かくれが われ つね かく え たま} 我が爲に堅固なる避所となりて、我に常に隠るるを得しめ給え、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) ルカ福音書 83 端 16 章 19~31 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、主は左の譬を設けて曰えり、富める人あり、紫袍と細布と
 を衣、日日奢り樂めり。亦貧しき者ラザリと名づくるあり、全身腫物を病みて、富める人
 の門に臥し、其食卓より遺つる屑を以て、腹を果たさんと欲せり、犬も來りて、其腫
 物を舐れり。貧しき者死して、天使等に因りてアヴラアムの懐に送られ、富める者も死
 して葬られたり。地獄の苦の中に在りて、彼其目を擧げて、遙にアヴラアム及び其
 懐に在るラザリを見たり。乃呼びて曰えり、父アヴラアムよ、我を憐み、ラザリを遣
 して、其指の尖を水に蘸して、我が舌を涼さしめよ、蓋我此の燄の中に苦む。然
 れどもアヴラアム曰えり、子よ、爾は存命の時爾の善を受け、ラザリは同じく其惡を
 受けたりしを憶え、今彼は此に慰み、爾は苦む。第此のみならず、爾等と我等と
 の間に巨なる淵は限れり、故に此より爾等に涉らんと欲する者は能わず、彼より
 も我等に渉るを得ず。彼曰えり、然らば父よ、請う、ラザリを我が父の家に遣せ、蓋我

ごにん きょうだい かれ そのまえ しょう な かれら こ くるしみ ところ きた
 に五人の 兄 弟あり、彼をして其 前に 證 を爲さしめよ、彼等も此の 苦 の 處 に來ら
 ざらん爲なり。アヴラアム之に謂う、かれら およ よげんしゃ これ き かれい
 たり、否、父アヴラアムよ、然れども若し死の中より彼等に往く者あれば、彼等悔 改せん。
 アヴラアム曰えり、もし も およ よげんしゃ き たと し ふくかつ もの しん
 ぜざらん。

(比較用 口語訳)

ある金持がいた。彼は紫の衣や細布を着て、毎日ぜいたくに遊び暮していた。ところが、ラザロという
 貧乏人が全身でき物でおおわれて、この金持の玄関の前にすわり、その食卓から落ちるもので飢えをし
 のごとと望んでいた。その上、犬がきて彼のでき物をなめていた。この貧乏人がついに死に、御使たち
 に連れられてアブラハムのふところに送られた。金持も死んで葬られた。そして黄泉にいて苦しみがら
 ら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとが、はるかに見えた。そこで声をあげて
 言った、『父、アブラハムよ、わたしをあわれんでください。ラザロをおつかわしになって、その指先を
 水でぬらし、わたしの舌を冷やさせてください。わたしはこの火炎の中で痛みもだえています』。アブ
 ラハムが言った、『子よ、思い出すがよい。あなたは生前よいものを受け、ラザロの方は悪いものを受け
 た。しかし今ここでは、彼は慰められ、あなたは痛みもだえている。そればかりか、わたしたちとあ
 なたがたとの間には大きな淵がおいてあって、こちらからあなたがたの方へ渡ろうと思ってもできな
 いし、そちらからわたしたちの方へ越えて来ることもできない』。そこで金持が言った、『父よ、ではお願
 いします。わたしの父の家へラザロをつかわしてください。わたしに五人の兄弟がいますので、こんな
 苦しい所へ来ることはないように、彼らに警告していただきたいのです』。アブラハムは言った、『彼ら
 にはモーセと預言者とがある。それに聞くがよからう』。金持が言った、『いえいえ、父アブラハムよ、
 もし死人の中からだれかが兄弟たちのところへ行ってくれましたら、彼らは悔い改めるでしょう』。アブ
 ラハムは言った、『もし彼らがモーセと預言者とに耳を傾けないなら、死人の中からよみがえってくる者
 があっても、彼らはその勧めを聞き入れはしないであらう』。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいは
 主 光 榮 爾 歸 光 榮
 はんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金ロイオアン聖体礼儀) へ